

談話構築から見た大過去形について

東郷雄二（京都大学名誉教授）

0. 本発表の目標

本発表は次の点を明らかにすることを目標とする。

- ① 時制は優れて談話的現象であり、単文ではなく談話（テキスト）の中でその働きを考察しなくてはならない。しかるに従来の文法では主に単文か、せいぜい 2 つの文で時制の働きを説明しようとしていた。例外はテキスト言語学のヴァインリヒ (1982)、談話表示理論の Kamp & Rohrer (1983)、Declerck (1991, 1994, 2006)、メンタル・スペース理論の Cutrer (1994) にほぼ限られる。
- ② Benveniste が明らかにしたように、談話には話し手の発話態度に応じて、discours と récit (histoire) という 2 種類の存在様態がある。discours での時制の働きと récit¹⁾ での時制の働きは異なるのでこれを考慮しなくてはならない。
- ③ Benveniste はフランス語の直説法の時制を discours と récit に割り振った。例えば現在形、複合過去形、単純未来形などは discours に属し、単純過去形・前過去形は récit の時制とされた。しかし半過去形と大過去形だけは discours と récit の両方に属することが従来から問題とされてきた²⁾。東郷 (2007) では discours の半過去形と récit の半過去形を区別するべきであることを論じたが、discours の大過去形と récit の大過去形も区別しなくてはならない。
- ④ 本発表では主に récit における大過去形の働きを考察するが、その際に重要となるのは「語りの〈今〉」と、「語りの時間の進行」という概念である。

1. はじめに

(1) 昔、フランス語初級文法の授業の後に授業学生が次のような質問をした。この質問は馬鹿げた質問だろうか。

文法の教科書には、「大過去はあるときを基準として、そのときにすでに完了している動作・状態を表す」と書いてある。Il s'est habillé et il est sorti. 「彼は服を着ると、出かけた」では、「服を着た」は「出かけた」よりも前に完了しているのだから、Il s'est habillé はほんとうは大過去にしなくてはならないのではないか。

本発表ではこれは馬鹿げた質問ではなく、今までの文法の時制の記述に欠けているものを鋭く指摘していることを示す。

(2) 朝倉 (2002) の« Plus-que-parfait »の項目に次のような記述がある。

1) récit (histoire) という表記は煩雑なので、以下では récit と表記する。

2) この点を問題にした研究に大久保 (2007) がある。

複過が直・現に後続し (…)、前過が単過に後続する行為を表すことがあるように (…)、直大も他の過去時制で表された行為より後で行われた行為を表しうる。

Joseph le vit remettre ses gants et s'éloigner entre les arbres. Au bout d'une minute, Praileau avait disparu. (ID, Moïra, 245)

ジョゼフは彼がまた手袋をはめ、木立の中を遠ざかっていくのを見た。1分後にプレローは姿を消していた。

Vous lui avez fermé la bouche en l'embrassant, mais le lendemain matin, vous aviez oublié. (Butor, Modif., 145)

あなたはキスをして彼女の口をふさいだが、翌朝には忘れていた。

(朝倉 2002 : 403)

1つ目の例では、大過去形 *avait disparu* が単純過去形 *le vit* より後に起きた出来事を表し、2つ目の例では大過去形 *avez oublié* が複合過去形 *avez fermé* より後に起きた出来事を表すと朝倉は述べているのである。確かに出来事が起きた順序はそのとおりである。しかし、それをあたかも大過去形の特長であるかのように書くこの説明は大きな誤解を招くおそれがある。このことを「語りの時間の進行」という観点から示す。

2. 談話における時制の働き

(3) 絶対時制・相対時制という概念は18世紀に遡る。

Lorsqu'ils représentent le temps de l'événement par la seule comparaison avec celui où l'on parle, ils sont *Temps absolus* ; lorsqu'ils le représentent par une double comparaison, non seulement avec le temps de la parole, mais avec celui de quelque événement, ils sont *Temps relatifs*. (Girard, Abbé, *Vrais principes de la langue française*, 1747)

時制が話している時との関係だけによって出来事時を表す場合、それは絶対時制である。話している時だけでなく、別の出来事の時との関係において出来事時を表す場合、それは相対時制である。

つまり、発話時現在 (t_0) を基準点として時間軸上に定位されるのが絶対時制で、発話時現在 (t_0) だけでなく、他の出来事の時点 (t_1) を基準点とするのが相対時制ということになる。しかしこの定義は時制の定位の様態を述べるに留まり、時制が談話の中でどのように振る舞うかを考察するには足りない。

(4) デクラーク (1994) ³⁾は談話の中での時制相互間の関係を捉えるために、**時間の支配領域 (temporal domain)** という概念を提唱する。その上で、ある場面がもう一つ別の場面に先行するか、同時的であるか、後続するか、という観点からとらえられている場合、前者は後者に**時間的に従属している (temporally subordinated to)**、あるいは、**時間的に束縛されている (temporally bound by)** という。時間の支配領域を定める場面をその支配領域の**中心場面 (central situation)** と呼ぶ⁴⁾。

a. Jim said that he was pleased that Bill had sent him a letter and that he would write a

3) Declerck の時制論は Declerck (1991) に始まり Declerck (2006) で集大成されたが、ここでは翻訳があり簡潔にまとめてあるデクラーク (1994) による。

4) Declerck の時制理論における中心場面は、Cutrer のメンタル・スペース理論に基づく時制理論における Focus スペースに当たることも Viewpoint スペースに当たることもある。

reply as soon as possible.

ジムはビルが手紙をくれて嬉しいと言い、そしてできるだけ早く返事を書くと言った。

a.では最初の単純過去形 *said* が中心場面を設定して支配領域を持ち、他の時制を束縛する。*was pleased* は中心場面との同時性を、*had sent* は中心場面にたいする先行性を、*would write* は中心場面にたいする後続を表す。時制間の関係を図示すると次のようになる。太枠の四角形が中心場面で、矢印は支配関係を表す。

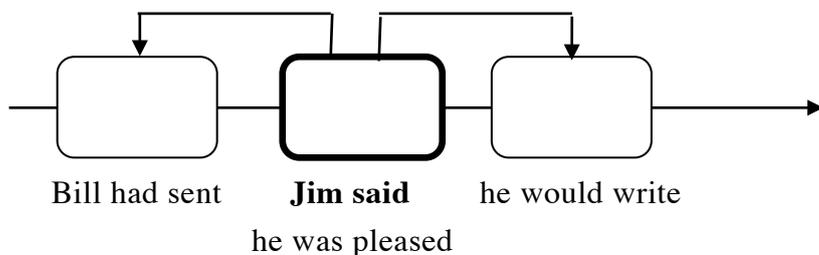


図 1

(5) その上でデクラーク (1994) は絶対時制に新たな定義を与えている。

時間の支配領域を定める時制 (すなわち、その領域の中心場面を示す時制) を、絶対時制 (absolute tense) という。 英語には絶対時制が四つある。すなわち、過去時制、現在完了、現在時制、未来時制である。(…) 絶対時制は、場面を、別の場面ではなく、直接発話時に結びつけるという特徴がある。時間の支配領域を定めるのではなく、もっぱら、ある場面を別の場面に結びつけるために用いられる時制を、相対時制 (relative tense) という。 (デクラーク 1994 : 119 下線は引用者による)

(6) 支配領域の転換 (shift of domain)

デクラーク (1994) はある事態を談話に導入するとき、その事態を既存の事態の支配領域に組み入れるか、それとも独立の支配領域を与えるかは話し手の裁量によるとしている。

a. *I left while Bill was sleeping and Mary was having a bath.* (デクラーク 1994)

私はビルが眠っていて、マリーが風呂に入っている間にその場を離れた。

b. *Suddenly the phone rang. Jill stood up from her chair, went over to the telephone and picked up the receiver.* (Ibid.)

突然電話が鳴った。ジルは椅子から立ち上がり、電話の方へ行って、受話器を取り上げた。

a.では *I left* が中心場面を設定し、*Bill was sleeping / Mary was having a bath* はその中心場面に従属している。これにたいして b.では、*the phone rang* → *Jill stood up* → *went over* → *picked up* のように、中心場面が次々と移動している。b.のように、新たに中心場面を設定することを **支配領域の転換 (shift of domain)** と呼ぶ。

同じ 1 つの事態に異なる時制の支配関係を与えることがある。次の c.では *got wounded* → *died* と支配領域が転換されているが、d.では *got wounded* はずっと中心場面のままで、*would die* はそれに従属して後続性を表す。

c. *The soldier got seriously wounded. He died shortly afterwards.* (Ibid.)

兵士は深い傷を負った。彼はまもなく死亡した。

d. The soldier got seriously wounded. He *would die* shortly afterwards. (Ibid.)

兵士は深い傷を負った。彼はまもなく死亡することになる。

この例で重要なのは、どちらも同じ事態を表しているのに、異なる時制が用いられているという点である。

(7) 支配領域の転換が起きず相対時制が用いられるとき、事態の時間的前後関係は相対時制が示す。次の a. では絶対時制の I knew が中心場面を設定し、相対時制の Bill had been, he had been は中心場面に従属することで先行性を表す。

a. I knew Bill *had been* in Yugoslavia before. He *had been* there when he was still a child. (デクラーク 1994)

私はビルが以前ユーゴスラビアに行ったことを知っていた。彼はまだ子供の頃にそこに行ったのだ。

絶対時制同士の時間的前後関係は言語的には表現されない⁵⁾。前後関係の判断は、語りの線状的進行というゆるやかな語りの原則と、私たちが世界について持っている常識によってなされる。次の b. では He went は I knew に先行するが、それは語用論的知識による判断にすぎない(行ったことを後から知るのだから、「行った」は「知った」より前のことであるという常識による判断)⁶⁾。

b. I knew Bill *had been* in Yugoslavia before. He *went* there when he was still a child.

(Ibid)

私はビルが以前ユーゴスラビアに行ったことを知っていた。彼はまだ子供の頃にそこに行った。

(8) デクラーク (1994) のまとめ

- ① 語りの進行において絶対時制は中心場面を設定し、時間の支配領域を持つ。
- ② 相対時制は中心場面を設定せず、中心場面に従属する。相対時制は中心場面との同時性・先行性・後続性などの相対的關係を表す。
- ③ 絶対時制によって新たに中心場面が設定されると、支配領域の転換が起きる。
- ④ 新しい事態を導入するとき、その事態を既存の中心場面に従属させるか、それとも支配領域を転換させて中心場面とするかは話し手の裁量による。

(9) デクラーク (1994) の時制理論の発展的解釈 (自由な変奏)

- ① 物語の進行は映画にたとえることができる。映画の比喩を用いると、中心場面とは観客の目の前のスクリーンに今映し出されているシーンのことである。中心場面は「語りの〈今〉」⁷⁾を表している。たとえば Il alluma une cigarette avec un briquet. 「彼はライターで煙草に火を付けた」と語られると、スクリーンにはまさに男が今煙草に火を付けている場面が映し出されている。
- ② 絶対時制は新たな中心場面を設定することで、語りの時間を前に進める。語りの時間とは発話時現在 (t_0) とは無関係に、語られた世界の中で流れている時間をいう。

a. Le bruit de la voiture dans la cour ①*réveilla* Charles. Il ②*entendit* Lucie chantonner

5) 相対時制同士の前後関係も言語的に表現されないが、ここでは詳しくは触れない。

6) 同じひとつの事態が had been という相対時制と went という絶対時制で表現されている。つまりここには支配領域の転換が起きているのだが、ここでは詳しくは触れない。

7) ここで「語りの〈今〉」と呼ぶのは、東郷 (2006) で「意識のポインタ」と呼んだものと同じものである。

en fermant la porte du garage et ③ *se demanda* avec stupeur quelle heure il pouvait être.
(Sagan, F. *La Chamade*)

中庭の車の音でシャルルは目を覚ました。リュシーがガレージのドアを閉めながら鼻歌を歌うのが聞こえて来て、彼は今いったい何時なんだろうとぼんやり考えた。

この例では、① *réveilla* → ② *entendit* → ③ *se demanda* と絶対時制が用いられることで、中心場面が次々と切り替わる。この場面の切り替えが語りの時間を前に進めている。言い換えれば中心場面の切り替えが、語りの時間の進行という意味効果を生み出しているのである。

③ 相対時制は中心場面を変更することがないので、語りの時間を前に進めたり、後に戻したりすることはない。相対時制が用いられるとき、「語りの〈今〉」は不動であり、語りの時間は停滞する。

b. Emma regarda le jardin par la fenêtre. Il *pleuvait*.

エンマは窓から庭を見た。雨が降っていた。

→ 「語りの〈今〉」は *regarda* の時点で、*pleuvait* は同時性を表す。

c. Elle ouvrit les yeux. Un vent brusque, décidé, *s'était introduit* dans la chambre.

(Sagan, F. *La Chamade*)

彼女は目を開いた。突然の一陣の風が意を決したように寝室に吹き込んできたのだ。

→ 「語りの〈今〉」は *ouvrit* の時点で、*s'était introduit* は先行性を表す。

d. Je lui demandai de m'accompagner. Je la *porterais* dans mes bras, loin de sa prison, au bout du monde.
(Belletto, R., *L'Enfer*, 鷺見 2003 より)

私は彼女と一緒にいこうと言った。この女を両の腕に抱いて、牢獄から遠く、世界の果てまで連れていくのだ。

→ 「語りの〈今〉」は *demandai* の時点で、*porterais* は後続性を表す。

c.では *ouvrit* の時点で語りの時間を止めて、大過去形で過去を振り返っているのであり、語りの時間が逆戻りしているわけではない。d.でも *demandai* の時点で時間を止めて、過去未来形で先を見通しているのであり、語りの時間が進んでいるわけではない。

4. 相対時制としての大過去形

(10) 多くの文法書の記述どおり、大過去形は過去のある時点を基準点として、先行する過去の事態、もしくは基準点におけるその結果状態を表す。多くの場合、基準点となるのは絶対時制が設定する中心場面である。次が典型的な用法である。

a. Tu as été content de revoir ta mère ? — Oui, j'*avais* longtemps *attendu* ce moment.

「お母さんに再会できてうれしかったでしょう」「はい、このときを長いあいだ待ち続けていました。」(目黒 2015)

a.の時制間の関係を図示すると次の図のようになる。

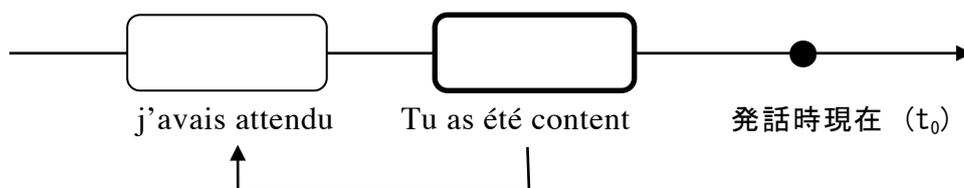


図 2

a. では絶対時制 *Tu as été* が中心場面を設定する (図の太枠の四角形)。大過去形 *J'avais attendu* は中心場面に従属し、先行性を表す (矢印は支配関係を表す)。これが大過去形の時制としての意味価値の基本図式であり、**大過去形がこれ以外の時間的關係を表すことはない**。大過去形の意味価値はただひとつである。

(11) ここまでの考察で、冒頭の(1)に示した学生の質問に正しく答えることができる。

文法の教科書には、「大過去はあるときを基準として、そのときにすでに完了している動作・状態を表す」と書いてある。*Il s'est habillé et il est sorti.*「彼は服を着ると出かけた」では、「服を着た」は「出かけた」よりも前に完了しているのだから、大過去形にしなくてはならないのではないか。

この質問に対しては次のように答えるべきである。

Il s'est habillé は一つの場面を描き、*il est sorti* も別の場面を描いている。この二つの場面は、語りの進行に従って映し出されるシーンのようなものである。あなたはまず *Il s'est habillé* が表す場面を見て、次に *il est sorti* が表す場面を見る。あなたが場面を見るのはこの順番である。

あなたが言う『服を着た』は『出かけた』より前に完了している」というのは、この場面の進行の中に身を置くのではなく、後から眺めて事後的に順序を付けたものにすぎない。もし *il est sorti* の場面で時間の流れをいったん止めて過去を振り返るならば、次のように大過去形が用いられることになる。

i) *Il est sorti. Il s'était habillé dix minutes avant.*

彼は出かけた。10分前に服を着たのだった。

しかし *Il s'est habillé et il est sorti.* では場面は時間軸の方向に展開しており、i) のように立ち止まって過去を振り返っているのではないので、大過去形を用いることはない。大過去形は立ち止まって過去を振り返る時だけに用いるものである。

(12) 文法の大過去形の説明には次が含まれるべきである。

大過去形は、一連の出来事を語るときに、過去の一時点でいったん立ち止まり、過去方向を振り返って、その時点より前に起きた出来事や、その時点に残っている結果状態を述べるときに用いる。

5. récit の大過去形と discours の大過去形

東郷 (2007) では *Le Guern* (1986) の示唆に基づいて、récit の半過去形と discours の半過去形を区別することを提案した。

(13) récit の半過去形

a. *Yannik entra dans le salon. Eléonore buvait du café.*

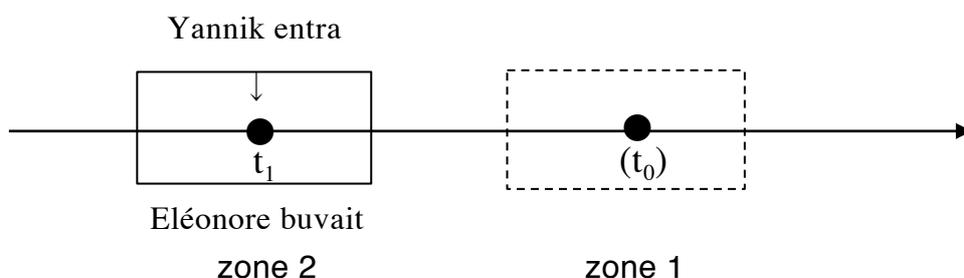


図 3

récit の半過去形では、発話時現在 (t_0) を中心とする zone 1 は背景化されて働かない。このことを四角形を点線にして示してある。絶対時制の *entra* が過去の時点 t_1 に中心場面を設定し、それが zone 2 を形成する。半過去形の *buvait* はその中心場面に従属し同時性を表す。教科書的な半過去形の用法である。このとき語り手（読み手）の視点は zone 1 から zone 2 に移動している。

(14) *discours* の半過去形

東郷 (2007) で *discours* の半過去形と呼んだのは、阿部 (1989) が「*Je t'attendais*. 型の半過去」と呼び、西村 (1985) が「不連続を表す半過去」と呼んだものである。

b. [待ち人がやって来て] *Je t'attendais*.

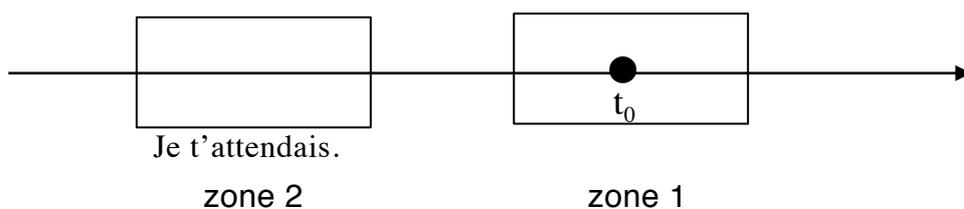


図 4

discours の半過去形では、発話時現在 (t_0) を中心とする zone 1 は働いており、話し手の視点は発話時現在にある。zone 2 は zone 1 と何らかの理由により断絶している過去の事態である。この例では待ち人が来たことによって、[*je-t'attendre*] という事態はもはや成り立たない。「もう待っていない」発話時現在に視点を置き、「待っていた」過去の事態を振り返るのが *discours* の半過去形である。

(15) 半過去形と同様に、大過去形にも *récit* の大過去形と *discours* の大過去形の区別が必要であることを主張する。以下にそれぞれを例示する。

《*récit* の大過去形》

a. Il bourra machinalement sa nouvelle pipe. (...) Peu de gens étaient levés. Par-ci par-là seulement, une lumière restait allumée, sans doute parce qu'il y avait des enfants qui *s'étaient levés* de bonne heure pour se précipiter vers l'arbre et les jouets.

(Simenon, G., *Un Noël de Maigret*)

彼は機械的にまたパイプに煙草を詰めた。(…) この時刻に起きている人は少なかった。そこここに灯りが付いているだけだった。たぶん早く起きた子供たちが、クリスマスツリーとおもちゃに駆け寄っているのだろう。

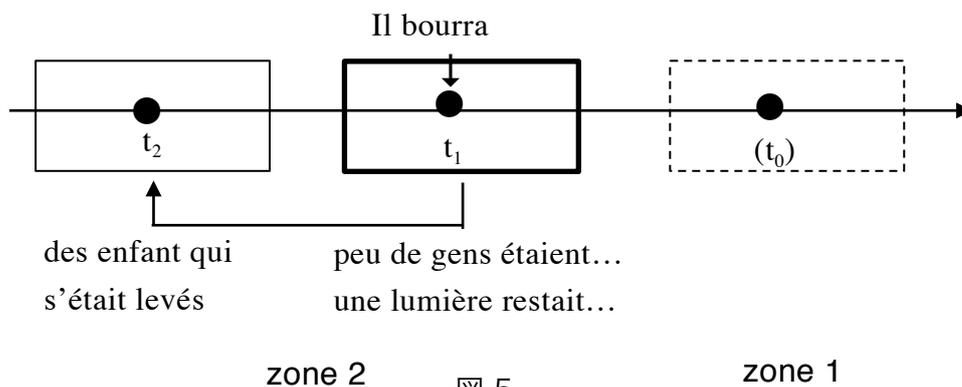


図 5

récit の大過去形では、récit の半過去形と同様に、発話時現在 (t_0) を中心とする zone 1 は背景化して働いていない。絶対時制の *Il bourra* が t_1 に中心場面を設定する。大過去形 *des enfants s'étaient levés* はその中心場面に従属し、先行性を表す。話し手の視点は t_1 の中心場面に置かれて過去を振り返っている。

《discours の大過去形》

b. [皿洗いをしていてうっかり皿を割ってしまった人に向かって]

Je te l'avais bien dit ! だから言ったじゃないか。



図 6

discours の大過去形では、発話時現在 (t_0) を中心とする zone 1 は働いており、話し手の視点は発話時現在にある。「うっかり皿を割った」という言語外的事実が zone 1 と断絶している zone 2 を作り出す。話し手と聞き手が語用論的に共有する「皿を割った」という事態が、言語的に表現されていないにもかかわらず中心場面として働く。大過去形 *Je te l'avais dit* はその中心場面に従属し、先行性を表す。

(16) récit の大過去形は主に語りで用いられるが、discours の大過去形は話し手と聞き手のいる会話で用いられる。次はその実例である。

[Léa と Blanche は Alexandre が一人でレストランにいるのを見かけて、中に入り Alexandre と話し始める。そこへ Alexandre の恋人の Adrienne が入ってくる。]

Adrienne : Alex, enfin, ça fait une demi-heure que je te cherche !

Alexandre : Je t'*avais* pourtant *donné* rendez-vous ici !

Adrienne : Hein ? Tu m'*avais dit* : « Au restaurant de la grande place. »

Alexandre : Non, j'*avais dit* celui-ci, mais tu n'écoutes pas.

(E. Rhomer, *L'ami de mon amie*)

Ad.: アレックス。やっとだわ。30分もあなたを探していたのよ。

Alex.: でもここで待ち合わせと言ったじゃないか。

Ad.: なんですって。あなたは「グラン・プラスのレストランで」って言ったのよ。

Alex: いや、ここでと言ったよ。君は人の言うことを聞かないんだから。

この例では「Adrienne が待ち合わせの場所を間違えた」という言語外的出来事が大過去形を支配する中心場面として働いている。

(17) 以上より文法の大過去形の説明には次を付け加えるべきであると考えられる。

大過去形には主に会話において、言葉で表現されない出来事を基準点として、それまでに完了している出来事を表す用法がある。たとえば相手に何かを指摘されて、*Je n'y avais pas pensé*. 「それは考えていなかったな」と言うときは、指摘されたことが基準点として働き、大過去形はそれより前のことを表す。

6. 時の副詞句が設定する中心場面

デクラーク (1994) の時制論では、中心場面を設定するのは絶対時制に限られていた。しかし動詞の時制だけではなく、時の副詞句も中心場面を設定する。時の副詞句は新たな中心場面を設定し、時の支配領域を転換して語りの時間を前に進める。たとえば映画で「それから3年後」という字幕が映されたら、映画の中の時間が3年進むのと同じことである。

(18) このことは従来の文法書でも指摘されていて、時の副詞句が大過去形の基準点となると言われている。

a. Le 20 octobre, il *avait terminé* son roman.

10月20日には、彼は小説を書き終えていた。(朝倉 2002)

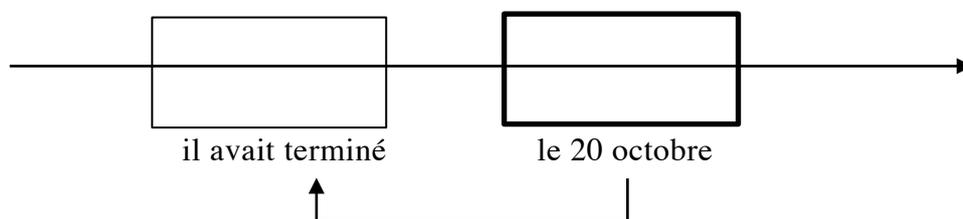


図 7

(図は東郷による)

(19) 時の副詞句は半過去形にも基準点として働くこともよく知られている。次の例では *une demi-heure plus tard* が半過去形 *roulait* が従属する中心場面を設定している。

Elle bâilla. Elle allait prendre la voiture et suivre le vent de printemps assez loin dans la champagne. Elle ne travaillerait pas plus aujourd'hui que les autres jours. Elle en avait, grâce à Charles, perdu l'habitude.

Une demi-heure plus tard, elle *roulait* sur l'autoroute de Nancy.

(Sagan, F., *La Chamade*)

彼女はあくびをした。これから車に乗って田舎を遠くまで春の風を追いかけるのだ。いつもと同じように今日も働かない。シャルルのせいで彼女は働く習慣をなくしていた。

半時間後、彼女はナンシーに続く高速道路を走っていた。

(20) ここまでの考察によって、(2)で示した朝倉文法の記述が大過去形の記述としては適切を欠くことを示すことができる。

a. Joseph le vit remettre ses gants et s'éloigner entre les arbres. Au bout d'une minute, Praileau *avait disparu*. (ID, *Moïra*, 245)

ジョゼフは彼がまた手袋をはめ、木立の中を遠ざかっていくのを見た。1分後にプレローは姿を消していた。(朝倉 2002 : 403)

b. Vous lui avez fermé la bouche en l'embrassant, mais le lendemain matin, vous *aviez oublié*. (Butor, *Modif.*, 145)

あなたはキスをして彼女の口をふさいだが、翌朝には忘れていた。(Ibid.)

朝倉 (2002)では、a.で単純過去形 *Joseph le vit* と大過去形 *Praileau avait disparu* を比較して、大過去形が単純過去形よりも後に起きた出来事を表すことがあるとしている点が問題となる。大過去形は基準点となる単純過去形より前に起きた出来事を表すのがふつうである。しかるに朝倉 (2002)の記述は、この原則に反して、単純過去形より後に起きた出来事を表すことがあると読むことができる。もしそうだとするならばこの記述は正しいとは言えない。出来事が起きた順番は確かにそのとおりなのだが、その順番が「大過去形の時制としての意味価値」に基づいているとするのはまちがっている。この例では時の副詞句が語りの時間を前に進めており、単純過去形 *Joseph le vit* がその時点で時の支配領域を失っているという点が見過ごされている。正しくは次のように考えるべきである。

a.ではまず *J. le vit* が中心場面を設定するが、副詞句 *au bout d'une minute* によって語りの時間は前に進む。同時に *J. le vit* は時の支配領域を失う。*au bout d'une minute* が新たな中心場面を設定し時の支配領域を持つ。大過去形 *P. avait disparu* はその中心場面にたいする先行性を表すという典型的な用法である。

この例の時制の関係を図式化すると次のようになる。

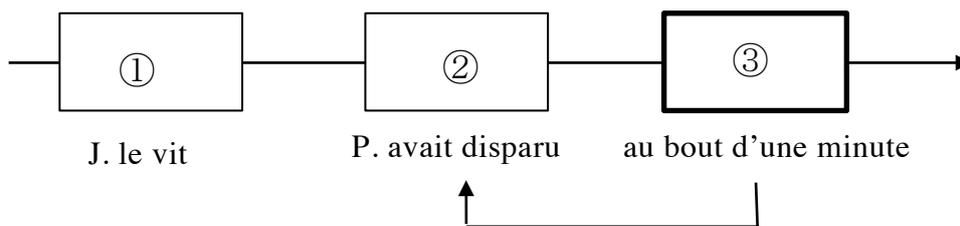


図 8

この図で重要なのは、大過去形の②*P. avait disparu* は副詞句 *au bout d'une minute* の設定する中心場面③に従属しており、その前にある単純過去形の①*J. le vit* とはいかなる時間的關係にもないという点である。語りの進行順から言うと、①→③→②の順序で出現するが、③の時点で語りの時間は前に進んでおり、①は時の支配領域を失っている。②は①とではなく③と従属関係に立つ。②*P. avait disparu* が③*au bout d'une minute* に対して先行性を表すのは、大過去形の時制としての意味価値によってである。このように時制としての意味価値に基づく順序関係を語ることは従属関係に立つ時制の間に限られる。

一方、②*P. avait disparu* が①*J. le vit* より後に起きた出来事を表すのは、大過去形の

時制としての意味価値とは何の関係もない。②と①の間には従属関係はないので、時制に基づいて起きた順序を語ることはできない。②の出来事が大過去形で表現されているのは③の支配を受けているからであり、①に先行するか後続するかということとは無関係である。

(21) このように、談話において連続して出現する時制形式の解釈においては、〈語りの時間の進行〉と、どの時制（または時の副詞句）が時の支配領域を持つかを考慮しなくてはならない。同じ順番で起きた出来事を、単純過去形でも大過去形でも表すことができる。出来事が起きた順序は〈コトの世界〉に属する事柄である。一方、それを言語でどのように表現するかは〈コトバの世界〉に属する。〈コトの世界〉と〈コトバの世界〉を混同してはならない。

7. 大過去形が浮き彫りにする中心場面

大過去形の意味価値によって、まだ出現していない中心場면을浮き彫りにするという語りの上での効果が生まれる。鷺見 (2003) が引く次の例を見てみよう。

(22) [主人公の〈私〉はフリーの記者で、新聞社のローラから依頼を受けて、とある村で催される祭りの取材に来ている]

Laura, du journal, m'avait téléphoné à midi. J'avais accepté la mission, malgré les exigences odieuses et tyranniques du vieux négrier. En effet, je ne sortais plus des limites de ma ville, voire des limites de mon appartement, car je puisais dans mes livres nombreux la matière de mes articles, et je me disais que la vie ne pouvait continuer ainsi. Mais je n'avais jamais fait de reportages sur le vif.

ローラが社から正午に電話してきた。仕事は引き受けたが、老奴隷商人ばかりにあれこれ一方的に言ってくるのは忌々しい限りだ。たしかに、私は町を金輪際出ていない、というよりむしろじぶんのアパルトマンを出ていない。つまり手許にある沢山の本を使って記事を書いていたわけで、こんなことがつづくはずはないと思ってはいた。だが、現地取材という奴はまだ一度もしたことがない。(鷺見訳、太字が大過去の部分)

(23) 上の例について鷺見は次のように述べている。

「主人公はある地方紙の記者で、町を離れた寒村で催される祭の取材にやってきたところなのである。(…) ローラが電話をかけたのはその日の正午のことである。主人公は取材を承諾して村までやってきた。つまり時間的にごく近いことが大過去で語られており、そのすぐあとで「それまで私は町を出たことがない」というどちらかといえば遠い過去に属しそうな事柄が半過去で書かれているのである。(…)

三つの大過去の箇所、この短編の語り手がくっきり浮かびあがらせているのは、おもしろいことに『私』という人物の物語における『現在』、つまり、とある村に到着直後の刻限である。この刻限は小説のなかでは過去という文法時制で示されるから、正午の電話は必然的に大過去で表されるにすぎない。」 (鷺見 2003)

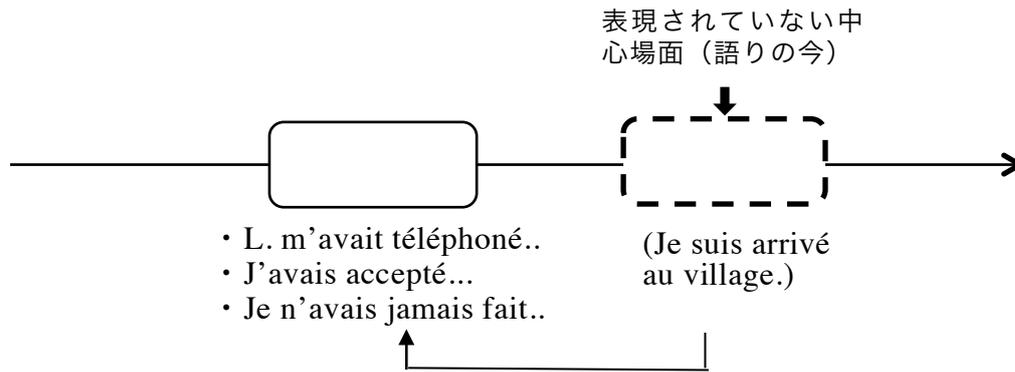


図 9

この一節では表現されていない「語りの〈今〉」である主人公が村に到着した時点が中心場面として働き、三つの大過去形はその中心場面に従属する。このように、大過去形を用いることによって、語り手が身を置いている「語りの〈今〉」を炙り出し、それを強く意識させる談話的效果がある。

(24) 物語の冒頭で大過去形が用いられることがある。

[クリスマスの早朝の場面。メグレ夫人は休日くらい夫に遅くまで寝ていてほしいと願い、ベッドまで持って行く朝食を準備する。しかしメグレはいつものように早く起きてしまう。]

C'était chaque fois la même chose. Il *avait dû* soupirer en se couchant :

— Demain, je fais la grasse matinée.

Et Mme Maigret l'*avais pris* au mot, comme si les années ne lui avaient rien enseigné, comme si elle ne savait pas qu'il fallait attacher aucune importance aux phrases qu'il lançait de la sorte. Elle aurait pu dormir tard, elle aussi. Elle n'avait aucune raison pour se lever de bonne heure. (Simenon, G., *Un Noël de Maigret* の冒頭部分)

いつも同じことだった。メグレは前夜ベッドに入る時に、ため息をついて次のように言わなくてはならなかった。

「明日は寝坊するよ」

そしてメグレ夫人はその言葉を字義通りに受け取ったのだ。まるで長年の夫婦生活で何も学ばなかったかのように。メグレがそんな風に放つ言葉を真に受けてはいけないことを知らないかのように。夫人ももっと遅くまで寝ていてもよかったのだ。こんなに朝早く起きる理由はまったくない。

【考察】

太字の大過去形はそれぞれ *Il dut*, *Mme Maigret le prit* のように単純過去形にしても語りは成立する。しかし大過去形にすることによって、大過去形が従属する中心場面が浮き彫りとなる。その中心場面とはやがて登場する「語りの〈今〉」である。この部分は「語りの〈今〉」以前のことを語っている。そのためこの部分は物語の本筋ではなく、本筋に入る前の舞台設定・背景説明であることを示す談話的效果がある⁸⁾。(中心場面は、クリスマスの早朝にもかかわらず、向かいに

8) この例の大過去形が、最初の *C'était chaque fois la même chose.* の半過去形に対する先行性を表すという解釈は適切ではない。この半過去形は東郷 (2010) で包括型の認識的半過去と呼んだもので、時間軸上に定位できるような特定の時点の出来事を表すものではない。したが

住んでいる二人の女性が訪ねて来て、前夜起きた奇妙な出来事の捜査をメグレに依頼する場面で、この一節から数ページ後に登場する)

8. 結論にかえて

本発表では次のことを示した。

- ① 時制の意味価値を究明するには単文ではなく談話（テキスト）における時制の働きを考察しなくてはならない。
- ② *discours* では発話時現在(t_0)が働くが、*récit* では働かない。このため *discours* での時制の意味価値と *récit* での意味価値は異なる。
- ③ *récit* では絶対時制や時の副詞句が中心場面を設定する。中心場面とは「語りの〈今〉」であり、読者の目の前に映写されている場面である。中心場面が転換されることによって、語りの時間は前に進む。
- ④ 絶対時制は時間の支配領域を持ち、相対時制を支配する。相対時制は絶対時制が設定した中心場面に従属し、同時性・先行性・後続性を表す。
- ⑤ 絶対時制同士の時間的前後関係は言語的に明示されない。「語りの線状的進行」という談話的原理と常識によって、ゆるやかに判断されるに留まる。
- ⑥ 相対時制は語りの時間を前に進めたり、後に戻したりすることはない。相対時制が用いられたとき、語りの時間は停滞する。
- ⑦ 相対時制同士の時間的前後関係もまた言語的に明示されることはない。
- ⑧ *récit* の大過去形は中心場面にたいする先行性を表す。仮に絶対時制に後続する出来事を表すように見えることがあっても、それは出来事の順番がそうになっているだけで、大過去形の時制としての意味価値によって後続する出来事を表わしているのではない。〈コトの世界〉と〈コトバの世界〉は区別しなくてはならない。
- ⑨ *discours* の大過去形は、話し手と聞き手が語用論的に共有する言語外的出来事が設定する中心場面にたいする先行性を表す。言語外的出来事は現在と過去の断絶を生むため、*discours* の大過去形は現在と過去との対比を表す。
- ⑩ 物語の冒頭で用いられる大過去形は中心場面を強く意識させ、物語の背景や設定を表す働きがある。

【参考文献】

- 朝倉季雄 (2002) 『新フランス文法事典』 白水社.
阿部宏 (1989) 「Je t'attendais.型の半過去について」『フランス語学研究』 23.
大久保伸子 (2007) 「フランス語の半過去の未完了性と非自立性について」『人文コミュニケーション学科論集』 2、茨城大学.
西村牧夫 (1985) 「現在にかかわる大過去」『フランス語学の諸問題』 三修社.
目黒士門 (2005) 『現代フランス広文典 改訂版』 白水社.
鷺見洋一 (2003) 『翻訳仏文法』 ちくま学芸文庫.
東郷雄二 (2007) 「Je t'attendais.型半過去再考」『フランス語学研究』 41.

ってそれに対する先行性も成り立たない。

- (2006) 「半過去は同時性を表すか? — 基準点理論のかなたに」日本フランス語学会第 238 回例会シンポジウム「半過去をめぐって」12 月 16 日東京大学駒場キャンパス.
- (2010) 「談話情報管理から見た時制 — 単純過去と半過去」『フランス語学研究』44.
- ヴァインリヒ、H. (1982) 『時制論 文学テクストの分析』紀伊國屋書店.
(原著 Harald Weinrich, *Tempus. Besprochene und erzählte Welt*, 1964)
- Cutrer, M. (1994) *Time and Tense in Narrative and in Everyday Language*, Ph. D. thesis, University of California, San Diego.
- Declerck, R. (1991) *Tense in English. Its Structure and Use in Discourse*, Routledge.
- (1994) 『現代英文法総論』開拓社. (原著 *A Comprehensive Descriptive Grammar of English*, Kaitakusha, 1991)
- (2006) *The Grammar of the English Verb Phrase, Vol. 1 The Grammar of the English Tense System*, Mouton de Gruyter.
- Le Guern, M. (1986) “Notes sur le verbe français”, S. Remi-Giraud et al. (eds) *Sur le verbe*, Presses Universitaires de Lyon.
- Kamp, H. & C. Rohrer (1983) “Tense in Texts”, R. R. Bauerle et al. (eds) *Meaning, Use and Interpretation of Language*, De Gruyter.